

『レオノーレ』序曲第3番(作品72b)は、ベートーヴェンが36歳の1806年に作曲された。もとになる歌劇『フィデリオ』は、すでに1804年に完成、上演されていた。ベートーヴェン研究家のA. シントラーによるとこの初演の際には、序曲第2番(作品72a)が上演されたことになっていて、2年後、06年の再演の際に第3番が改めて作曲、演奏されたことになっている。そもそも『レオノーレ』序曲は、4曲ないし5曲書かれたようである。ベートーヴェンの思い入れ深さが窺い知れるというものだ。歌劇『レオノーレ』の方も、06年の再演、14年の再々演の際に改訂されていて、序曲の改訂はこれに付随するものである。数度に及ぶ改訂を後世の研究家の間では、ベートーヴェンの歌劇嫌いによる不完成さだと説明することがある。がこの説明は誤りだ。改訂を余儀なくされたのは、台本の悪質によるのであったのだ。ヒロイン、レオノーレやその夫フロレスタンのアリアへ付された歌詞は、改訂を重ねて親友のブロイニクや宮廷歌劇場監督兼附詩人トライチュケの努力でこれまでにになった。フロレスタンのアリア『人の世の美しき春にも』も何度も書きなおされたものの一つで、また改訂を重ねたどの序曲にもその断片が挿入されている。運命を従容し、深い信仰によって救われようとする心が歌い込まれている。

組曲『ファウスト』は、1859年、グノー40歳の作品である同名のグランド・オペラからの組曲である。ゲーテの原作から離れていることもあってドイツでは『マルガレーテ』と呼ばれることもある。同オペラは、グノーの名を不動のものにした作品であり、不完全なかたちではあるが我が国で最初に上演された(明治27年)オペラでもある。グノーは、高名な画家である父とピアノ教師の母を持ち、幼くして父を失って生涯マザコン的性格を持ち続けるが、家庭生活はいたって幸福であり、音楽家としても成功し学士院会員となりまた、レジオン・ドヌール勲章をも受けている。その音楽は、仏・伊・独の折衷でありその歌劇は、性格描写の不十分さと劇場感覚の不有を非難されるが、旋律美の魅力は卓抜している。フォーレ、ドビュッシーへの影響は大で「彼なくしては」といわれている。『ファウスト』は、組曲として演奏されることで、グノーの優雅・清楚・端正・洗練・真摯の諸特徴を佳く表わすかもしれない。

『ライン』は、1850年、シューマン40歳の作である。歌劇『ゲノフェーファ』の上演がライプツィヒ劇場で不首尾に終わると、ドレスデンに嫌気がさしたシューマンは新天地を求めてデュッセルドルフに転居した。F. ヒラーの推薦で、後任としてデュッセルドルフ市の音楽監督になったのである。しかしドレスデンは彼にとって決してマイナスな時代ではない。病気の克服によって、いわゆる「巨匠期」がドレスデン時代から始まるからだ。たぶんシューマンは、劇場との関わり合から時間的に制約されることが多く、管弦楽曲の作曲に創作意欲持ちながら果たせなかったのだ。その意欲を捨て切れずに彼はデュッセルドルフ行きを決心したのだろう。

第1楽章は、ベートーヴェンの『エロイカ』との類似性を指摘されることが多い。変ホ長調という調性の所以であろう。が第2楽章のスケルツォはベートーヴェン風ではなくなり、素朴な民俗舞曲的観が見られる。第4楽章は、ケルン大司教の枢機卿への就任を祝う儀式に発想を得ていると言われている。以上のような諸特徴を持ちつつ全体は、シューマンの「表」の部分を示している。が初演は、旧居のドレスデンでおこなわれ、2年後にやっとデュッセルドルフでの上演が行なわれた。51年にかけてのシーズン後半は、シューマンの「裏」の部分を示す作品でいっぱいになる。闘病と残された時間への焦燥からエネルギーギッシュな創作が続くが、54年に投身自殺をはかったのちは、2年間の療養の甲斐なく46歳の生涯を終えている。(藤井部 勉)